
剣将になったら

連連

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣将になったら

【Nコード】

N9202F

【作者名】

連連

【あらすじ】

先の大戦で父を失い、敗戦理由のスケープゴートとして、家族をも失った秀真。彼はそんな故国に復讐すべく旅に出たのであった。

第一話 剣将

「いなな
嘶け！ 赤刀馬」

赤い刀身が滑らかに滑り、次々と羅国の兵士を二等分していく。赤い血潮に映る刀の軌道はまるで、馬の駆けるが如くである。

場が凍り付いた。

「ひけい！」

何かわからない気配に怯えながら、叫び声上がる。

指揮官と思われる大柄の男の声には恐怖が滲み出ていた。落ち着いた印象を与えるであろうその瞳も、今回ばかりは焦りが支配している。

涸れてもなお撤退を呼びかけるが、声が届くか届かないかする内に自国の兵達は次々と柘榴ざくろのように潰れていった。

先ほどまでは確かに、羅国が優勢であったのだ。出陣する時でさえ、理国に遠征する際の道でしかないはずだった。

——簡単な戦である。

その単純な思いこみが命取りとなったのである。たった数刻の間に戦況は大きく覆され、今や三分の一を失う痛手を負ってしまった。それほどまでの圧倒的な力に、指揮官の男は心底恐怖していたのだ。

「ひけい！ ひくのだ！」

何度呼びかけようと、退いた瞬間には、血潮が池をつくっていった。

「弾ける……。裂風」

低く穏やかな声が聞こえたかと思うと、男の右腕が弾け飛んだ。

これではもう武器を握ることもできない。

「ぐうつ……！」

「貴殿が指揮官か。悪いが、晋国に攻め行った貴国の落ち度だ。死んでもらおう」

瞬間、意識が飛んだ。

薄れゆく意識の中で、男はもう会えることも無い家族の名を叫んでいた。

指揮官がいた場所には大量の血溜まりと、鎧の破片が残っているのみであった……。

「秀真^{ほつま}……。貴殿の縁者の名か」

——これが、後に語られる晋羅の乱である。

ことの全貌は不明であるが、兵力に蟻と象ほどの差がある小国晋と大国羅の戦いは、晋国の圧倒的勝利で幕を閉じた。

このあり得ない展開に、様々な憶測が飛び交った。

「晋国には化け物がいる」、「皇帝は闇と契約した」、「羅国は呪われていた」などである。その中に、「剣将に睨まれたからだ」といった噂が流れた。

剣将という言葉に何人かは首を傾げたものである。そういった者は必ず余所者である。理・羅・晋・斗国の出身であるならば、まず知らない者はいないのだから。

——剣将。

それは、四国の神話に登場する十三人の將軍のことである。一騎当千とも言われるその實力は、軍事大国といわれる羅をも遙かに凌ぐ力を秘めている、とされている。

だが、剣将はいわば御伽噺の中の登場人物でしかない。故に、それは伝説でしかないとして、すぐに他の他愛もない噂にかき消されてしまった。

今や、ただのありふれた噂の一つでしかなかった。

この事実を見た者以外には……。

第一話 剣将（後書き）

更新するのは非常に遅いと思いますが、ご容赦を。

第二話 秀真

『やーいやーい、裏切り者の子おー』

いつもと変わらない風景である。少なくとも秀真はそう思っていた。

先の晋羅しんらの乱で、羅国の將軍真朋まともが死んだ。その時、負けるはずの無い戦で負けたのは、真朋が敵国と通じていたからであり、口封じのために殺されたのだ、と根も葉もない噂が流れた。敗戦したことに憤りを持つ人々は噂を信じ、こぞつて真朋を批判した。結果、真朋は裏切り者の汚名を着せられ、親族は迫害を受けることとなった。真朋の死は敗戦理由のスケープゴートとして使われたのである。秀真もまた、そんな被害者の一人である。真朋の息子というだけで相当風当たりがきつかった。

ある晩のこと。

家を燃やされた。

誰の仕業かはわからなかったが、大方の予想はついた。周囲の人々は、誰も手を差し伸べようとはせず、ただ見ているだけだったり、天誅てんちゅうだと囁ささやいている者もいた。

味方はおらず、周囲は全て人以外の何かに思えた。

ただ、赤く燃えている。周囲の人間にとってそれはたったそれだけの出来事でしかなかったのだから。

たった一晩で秀真は家と家族を失ったのだった。燃え盛る炎と煙に巻かれて、気がつけば母は黒くくすんでおり、弟は焼け死んでいる。何故か秀真だけが生き残ってしまったのだ。

秀真はその日を境に、街を出た。父が死んだ理由を知るべく、そして全てを奪った羅国に復讐すべく、秀真の心の奥底でそれは轟々と燃えている。

とても長い放浪の旅に出たのである。

第三話 無名

——毘左山脈。羅国と晋国の国境にある大山脈である。昔、晋国の高僧黄輪おうりんが修行のために訪れた土地としても有名で、その高さは約4700登里とりという大陸一の高さを誇っていた。

山頂にはかつて斗国と晋国の間にあった紀国を滅ぼしたという龍の巢があり、旅人を食い殺しているという噂まであった。

そんな危険な山に何故か秀真はいた。まだ二合目という所で、一休みしている。

「ハーハー。何て山だ。頂上が霞んで見える」

秀真のいる位置はまだ雪こそ無いものの、下とは約6度もの気温差があった。

吐く息が白く染まる。

父真朋が死んだ国、晋国を目指しているのだが、前に家を失った時に金目のものは全て失っており、船に乗るにも何をするにもお金が足りなかった。晋国に行くにはどうすべきかということを考えて行きついた先が、毘左越えというとても発想だったのだ。

前に進むにつれ、周囲の気温は徐々に下がり、足下にも見慣れない白い雪が出始めていた。

夜に近づく度に、低い唸り声や遠吠えが遠くで聞こえ、それが山並みに反響する。ガチガチとなる歯を必死に抑えながら、秀真はひたすら向こう側に行くべく前に進んだ。

途中、見晴らしのいい台地に出たが、止まればいいものを見向きもせず進んでしまったために、夜になった頃には未だ寝床も見つけられない状態で山をさまよっていた。

そういえば、と、ふと目に入った程度だったが洞窟があったのを感じ出した。

今から闇雲に進むよりも、一旦引き返して洞窟で一晩過ごしたほうが得策である。そう思い、クルリと身を翻して下り始めた。

しばらくして、ポカリと口を開けた洞窟を見つけた。これならば、風よけにも獣よけにもなるであろう。

洞窟の中に入ると、成る程予想通り、空気がこもっており暖かい。しかし、この暖かさはただ空気がこもっているだけではあるまい。硫黄のツンとした臭いが鼻を突き抜けた。

温泉でもあるのだろうか。もしあるのなら、これ幸いと秀真は洞窟の奥へと誘われるように進んでいく。硫黄の臭いがきつくなってきた。辺りには水蒸気が上がり、岩肌自体が熱くなっていく。しばらくして、温泉を見つけた。ゴポゴポと唸るお湯から舞う水蒸気は、お湯というよりも熱湯から沸いている。先ほどの寒い場所から一挙に熱い場所へと来たものだから、水蒸気が当たっただけで火傷しそうに感じた。

ここが噂にいう龍の巣であろうか。山頂には無いものの、そんな雰囲気醸し出しているため、つい後退りしてしまう。

もしも本当に龍が居るのならば、秀真は何も出来ずに喰われてしまっただろう。それこそ剣将の出番というものだ。

白い水蒸気の中に黒くうねる影が見えた。

——龍！

予想は外れた。火蛇^{かじゃ}である。高温の中で生きる水蛇のことだが、火蛇と水蛇の違うところは、火蛇は水の中では生きられないことにある。故に、人の生活圏では殆ど見ることは叶わないが、逆にいえば、温泉や火口に行けばだいたい生息しているので、そこまで珍しくはなかった。

火蛇の頭を見た時、ホットした安堵感と、少し残念だったという感情が沸いたことに驚いてしまった。安堵はわかるが、残念とは。まるで龍に会いたかったかのような思いを彷彿とさせる。

火蛇が体をうねらせながら姿を現す。その体の色合いに、秀真はポカんと口を開けてしまった。

火蛇によく見られる白い色では無く、それは影のように黒かったからだ。まるで先ほど水蒸気に写った影が丸々抜け出てきたかの

ように。

火蛇はそのまま、秀真の前まで来たが、突然左に向いたかと思うと、岩壁しか無いところへと真っ直ぐと進んだ。

秀真は目を疑った。

火蛇は、焦げ茶色の岩肌をスルリと通り抜けてそのまま壁に溶けていったからだ。

あわてて岩肌に触れようと手を差し伸ばす。この時、周囲の岩肌が高温になっているのを忘れていたのだが、それが触れる勇氣へと繋がったのは特筆すべきことである。

熱いと感じることも無く、秀真の手はそのまま宙を掴んだ。壁をすり抜けて……。

「何だこれ……？ 幻覚、なのか？」

岩肌の向こうにあるであろう手を何度も掴んだり放したりしたがやはり、手は何事も無いかのように自在に動く。

こうなると、興味の焦点は壁の中に移った。何故人を阻むような壁があるのか。一体、壁の向こうには何が隠されているのか。考えるだけで興奮が止まらない。

秀真は、通り抜けようと勢いよく飛び出した。

——ゴッソ！

勢いよく頭を打ってもんどりをうつ。

どうやら、手を通した位置は幻覚だが、頭がある位置は本物の壁だったようだ。

打ってコブができたであろう頭をさすりながら、手で幻覚と本物の境を探ってみる。丁度、首から下が幻覚のようだ。

前かがみになって、今度こそ岩壁を通り抜けることに成功した。そこはただポツカリと空間が開けているだけである。いや、よく目を凝らすと、地面に長い棒が突き刺さっている。

色が地面とは違うので、それが顕著に見てとれた。

秀真は、その棒を掴んで引き抜こうとした。だが、まるで地面と一体化してるかのように、棒はビクともしない。

興奮と好奇心に煽られ、さらに頭にコブという多大な犠牲を払ったのだ、ただの棒がありましたではすまされない。

——ドクンッ——！！

心臓の鼓動音のようなものが聞こえた気がした。いや、何度も繰り返し、聞こえる。音が耳に入る度に、体が震動し、目の前がぶれた。

（なん…力…求め…か）

「？」

「汝は力を求めるか？」

はつきりとした声が、硫黄に包まれた洞窟を凍らせる。

とっさの出来事に、秀真は頷いていた。

「ならば、汝にその資格があるか、証明してみせよ」

棒がスッと地面から抜けた。

よく見ると、錆びてはいるが刃がついている。どうやら棒だと思っていたものは、鏢の無い直刀ちてのようだ。

「我は無名むみょう。汝に資格があるのならば、いずれは我の真名まなにたどり着こうぞ」

声は洞窟内を反響して徐々に消えていった。

第四話 蒼い獣

洞窟を出た頃には朝になっており、まだ朝焼けの白い陽光が雪に反射してキラキラと輝いていた。

洞窟内でのやりとりは予想以上に長い時間を費やしてしまったようだ。だが、秀真はあまり疲れを感じてはいなかった。

手に握られた赤黒い棒が白い光に触れた瞬間、フツと色を変えた。それは光のあたる刃を中心として青く青く、透明に、そして光が透き通るくらいに薄くなった。

不思議と、今はまだ無き、刀の名を思い浮かべることができた。名というよりは形であろうか。

白い大地を駆ける白銀の獣達の中心にそれは居た。毛並みは青よりも蒼く、大きな爪と鋭い牙は誇りを讃え、瞳は太陽の如く金色をしている。その遠吠えは、見るもの圧倒し、威厳に満ちた存在感を尚更引き立てた。

ここまで鮮明に見えるのに名前がわからない。まだ資格を持たぬ証拠なのだろうか。

このような幻想は、刀の名を知るということに新たな楽しみを付加させるものである。

事実、秀真は力を得ることよりも、まずは名を知りたいと思ってしまったのだから。刀と蒼い獣、名は同一だと何故か確信がもてた。

変貌した刀を杖のようにして、山をどんどん登っていく。薄っぺらい刀身がサクツ、スル、サクツ、スルと地面に刺さっては抜けるのだが、一方に曲がったり折れたりする気配がなく、丁度いい具合の位置に刺さってくれる。不思議な刀である。まるで地面そのものが刀の鞘であるかのような感覚をもたらした。

山の頂上に差し掛かる時、無名が突然鳴き始めた。カタカタと震動する。黒い影が地面を横切ったかと思うと、突然真上から物凄い

突風が吹き付けてきた。

「なっ……」

懸命に堪え忍びながら、真上を見る。するとそこには、黒い体に四つの腕を持つ巨大な飛竜が飛んでいた。

「あれが、紀国を滅ぼした毘左の竜？ 現実にいたなんて……」

竜は人の言葉で、秀真に警告した。

「汝の持つ将器しょうぎ、この山より出づることを禁ずる」

「将器？ この刀のことか？」

「蒼き獣なり」

先ほど浮かんだ鮮明な映像を思い出す。

「やはり……。しかし、断る！！」

右手に持った無名刀を掲げて叫んだ。

空白の間に何を思ったのか。恐怖に勝ったのは好奇心か、それとも裏切った故国への復讐心か。

「ならば、資格を示せ。翼に認められし者だけが将器を持つ資格を与えられる」

そう告げて、竜はその巨大な翼を羽ばたかせるのであった。

第五話 頂亀

「さつきから何なんだ。お前は何者なんだよ」

目の前にいる巨大な竜に向かって叫んだ。

「我は番。つがい我は対。我は陽。ひかり我の名は、頂亀。ちようき」

竜は大きく息を吸い込むと、周囲の連峰に轟かんとする大きな声で吼えた。

「将器を持つものよ。資格を示せし時、共にあることを許そう」

竜は口から白い煙を弾丸のようにして吐き出した。秀真には当たらず、後ろの岩に直撃する。

岩は風化して砂になった。サラサラと呆然とする秀真の顔に吹き付ける。

「は、反則だろー！」

「威嚇か。お前さんも随分優しくなったのう」

突然、後ろで声がした。振り向くと、白髭しろひげを蓄えた老人が、先ほど砂となった元岩の上に立っていた。

「元癸か。げんき何故に試練の邪魔をするのか」

「見ていて思つたのじゃが、戦うにしても鞘を扱える程度でなければお前さんも楽しくはなからう？」

「う……む。しかし、試練に楽しいも何も……」

「それに、これでは試練も何も、一方的な虐めじゃよ」

「それは、その程度の力量で将器を持ちだそうとした、そ奴に落ち度があるうぞ」

「お前さんに並ぶ力量を持つ者なぞ、そうそうこの世にはおらんわい」

「汝は何が言いたいのだ」

仙人のような風体をした老人は、ニカツと笑った。

「こ奴を儂わしに預けてみんか？お前を楽しませる程度には鍛えてやる」

『なっ！』

秀真と竜は同時に驚いて、声がハモってしまった。この元癸という老人が何を考えているのか、全くもって察することができなかつたからだ。

第六話 元癸

「童^{わらわ}よ。儂の名は元癸。今からお主の師匠よ」

「師匠！？ 弟子いゝ！？ 突然何言ってんだ爺さ……」

秀真の口が閉じるかしないかする内に、元癸はサツと動いた。長い髭をいじりながら、突然秀真に足払いをする。

とつさのことに反応できず秀真は無様に転けた。

「いつてえー。突然何をしゃがる」

「今のお主は弱すぎる。儂にさえ勝てぬじやろう」

「そ、それがどうした」

元癸は目閉じた。少し残念そうにも見える。

「お主は何故、将器を手にしたのじゃ。何か成し遂げたいことがあるからじやろう？」

「……」

「図星か」

「あんたに何がわかる」

父の死から始まった不幸に翻弄され、国に裏切られた秀真。絶^{すが}るものは無く、ただ堪え忍ぶしかなかった。繰り返し続く苦痛で何度心臓を抉られるそんな気分を何度味わったことか。

「わからぬな。じゃがのう、お主はこのままでは死ぬ。儂や頂亀に殺される。ならば、目的を果たすために全てを利用するだけの意気込みを見せてみよ！」

「……。全てを、利用する……」

「お主の目的はなんじゃ？ 何故、将器を手にした」

頭が真っ白になり記憶がグルグルと回る。呟きが沸々と沸き上がり、自然と言葉が紡がれる。

「わからない。俺は何故生きている。家族を奪った羅国への復讐のため？ 否、わからない。俺が何のために生きているのか、それが知りたい」

白い髭をワサワサと触って元癸は告げた。

「ならば生き残れ。生きて生きて生き抜いて、最後まで足掻いてから死ね。そうすれば生きる理由にたどり着けるじゃろうて。少なくとも、お前は将器を手にする資格を得た。それが貴様の生きる理由探しに役に立つじゃろう」

「！？ 資格？」

「といっても、将器に認められるには三つの資格が必要じゃがな。お前さんはまだ一つしか持ち合わせてはおらん」

元癸はカツと両目を開く。途端、砂塵を巻き上げる突風が吹いた。
「再び問おう。儂の弟子となれ」

前門の狼、後門の虎ならぬ前門の頂亀に後門の元癸。弟子になれば待つのは死。生き残ればそれは力を得るということ。

「少々分は悪いが、生き残るにはあんたの弟子になるしかないってことか。考えるまでもない。答えは、是だ」

「ふむ……。ではまず」

そういつて元癸の拳が秀真の頭に直撃した。凄い音が響く。

「あいたつ。あんた何すんだ」

「あんたでは無い。師匠と呼べ。敬語を使うことも忘れるな」

「うう……師匠」

「うむ！」

大きく満足げに頷いた。白い髭がワサワサと上下する。

そのやりとりを見ていた頂亀が、何か言おうとしたが、それを意図したかのように元癸に先を越された。

「毘左からは出ぬ。修行は山中で行う」

言いたいことを先に言われたのか、頂亀はすぐに黙りこくった。

第七話 鞆

元癸に弟子入りして七ヶ月が経とうとしていた。その間に、麓の季節は変わり、新芽が放つ淡い緑は夏の濃緑へ、山は世界を彩る紅葉へと移り変わっていった。毘左の山も例外ではなかったが、山頂付近は相も変わらず白一色である。

この、一年も経たぬたった数ヶ月でも、秀真にとっては厳しい修行の日々でしかないのが現実であった。

——山頂付近にある洞窟に秀真の姿が見える。肩にはその数倍はあるつかという巨大な魚が背負われていた。

「おい、師匠。言われた通り。雅楽がらくの滝に住む主を釣ってきたぞ」
「はあ。ついに敬語は直らんかったか……」

心なしか少し落ち込んでいるようにも見えた。

突然、何を言い出すのか訝しげっていると、元癸は真剣な雰囲気を出しながら秀真の正面に立った。

「秀真よ。お主が来て早七ヶ月じゃ。そろそろ基礎体力もついた頃じゃ」

「基礎体力？」

「うむ。以前のお主は鞆を扱えるほどの体力がなかったからのう」

「鞆？ やつと修行らしい修行に入れんのか？ 弟子入りしてから一度も将器には触らしてくれなかったが」

「ゴホン！！ まあ、そういうことじゃな」

遂に特殊な修行に入れると思ったのか秀真の目は輝いている。

そこに水を差すかのように元癸の言葉が飛び込んできた。

「期待しているところ悪いが、鞆を未だ持たぬお主には扱い方しか教えられんぞ」

秀真の体が硬直する。

「え？ それはつまり……」

「つまり、鞆を持たぬお主には使えぬ」

「……」

ガラガラと崩れる擬態語を心の内に響かせながら、大きな溜め息をついた。

「それ意味あんの？」

「鞘を得た時、初めて意味が生まれるのじゃ。じゃが、鞘が使えるだけで大分変わるぞい」

「？」

「近年は使えぬ者が多いのでな」

「使えぬ者が多い？ それじゃあまるで、他にも将器があるみたいな言い方じゃないか」

「む、言わなかったか？ 将器は全部で13個あると」

「……。ほんと？」

「儂、嘘つかない」

「……」

つぶらな瞳で見つめてくる元癸を疑わしげに見ていたが、何となく嘘でないような気がした。

「13個ってまるで、剣将みたいだな」

「みたい、では無く、将器は剣将の剣のことじゃよ」

「へ……！？」

何を当たり前なことを、と言いたげな顔をしている。

「じゃあ、俺も剣将？」

「将器に認められればな」

「そつか……。俺が剣将……」

まるで自分が剣将になったかのように思えて、顔がにやけてきた。
「認められればな。じゃが、未だ将器の真名を知らぬ以上、お主はただの浮浪者じゃ」

「浮浪者って酷いな、おい」

「さて、本題じゃが……」

「スルーしやがった」

秀真の言葉は空しく右から左に流れただけだった。

「話の腰を折るな。もう教えぬぞ」

「すみませんでした。御師匠様」

まるで勤勉な弟子のように、態度を豹変させる。

「現金な奴じゃな」

口では見透かすようなことをいいながら、元癸も満更では無いらしい。

「ふむ。鞘の話じゃったかな」

「はい、そうです」

「……」

「？」

「やっぱり普通に喋れ」

「？」

「普段、敬語を使わぬ奴が突然敬語を使うなど、掌を返すようで気持ち悪いわい」

酷いいわれようである。

「師匠、早く鞘の話してくれよ」

「お前という奴は……。まあ、よい」

仕切直しに軽く呼吸を整える。

「いいか、鞘とはいわば将器の半身。鞘があつて初めて真名は真価を発揮する」

「真名？」

「将器を手にした時、声が聞こえなんだか？」

「そういえば、真名を見つげるとかなんとか言ってたな」

「真名とは将器の真の名じゃ。真名を知るということは、将器を扱う資格を得ることと同義じゃ。故に、将器の真名は秘伝中の秘伝。」

口外無比の秘言なのじゃ

クワツと見開いた瞳が、如何にもな迫力をみせた。

「じゃが、悲しいことに、真名は受け継がれる一方で、鞘の存在は忘れられつつある」

心底、落胆しているようである。元癸が何故そこまで落ち込んで

いるのか秀真は不思議でならなかった。

「なあ、真名つてそんな簡単に見つかるもんなのか？」

「結論から言えば、簡単じゃ。何故なら、将器を手にする者は真名を知っていることが前提にあるからの。お主の場合は希有な例じゃ。将器の殆どは所持者の子々孫々に脈々と受け継がれる。それとも真名も受け継いでいるのじゃ。じゃが、お主の場合、毘左に眠っていた将器に偶然出会った。故に、鞘の存在や真名さえも知らぬ。いわば前代未聞じゃの」

「へえー。じゃあ、他の所持者より不利なんだ」

「そうとも言えぬがな」

元癸は、自慢の仙人髭をワシャワシャと撫でながら、皮肉げ含み笑いを見せた。

第八話 地鞘（前書き）

この話は説明が主です。わかりにくいところも多いと思いますが、その辺りはご容赦下さい。

第八話 地鞘

「鞘の使い方教えてやるのじゃから、真名を知ると同等のハンデじゃろ？」

「でも使えない……」

秀真の皮肉が聞こえる。

「一生持たぬわけではあるまいに。そもそも頂亀と再戦するんじやから鞘が無ければ瞬殺じゃ。毘左におる内に見つければよい」

「そんなにおいそれと見つかるかな」

「見つかるのではない。見つけるのじゃ。でなければ、待つのは死」

「またそれが……」

これも宿命か、と半ば諦めながら秀真は素直に話を聴き始めた。

「鞘とは将器の武技の一つじゃ。決して刃を収めるだけの鞘のことでは無く、刃を守り共に戦うためのものじゃ」

「鞘を扱うつてのは、鞘 という力を扱うつてことか」

「うむ。鞘は将器ごとに違う。また、将器の鞘には二種類ある。一

つは命無き鞘である地鞘^{ちしやう}。もう一つは命在る鞘、天鞘^{てんしやう}じゃ」

「鞘が生きてるってこと？」

「そうじゃ。儂や頂亀が鞘であるようにな」

「??? 師匠が鞘……!？」

「儂は人間にあらず、頂亀も竜ではない。本来は鞘が原型であり、今の姿はあくまで鞘による力じゃ」

「師匠、人間じゃなかったんだ。じゃあ人でなしか」

体から剣を抜く元癸……。想像しただけで笑いがこみ上げてきた。

——ゴツン！

秀真の頭に拳骨が下る。

「意味を違えるな、愚か者め」

「冗談が通じないとは」

元癸がもう一度腕を振り上げると、さすがに怖じ気づいたのか、

秀真はすぐに身を竦ませた。

「し、師匠は俺の将器の鞘なんですか？」

「違うわい。それと、いつお主の将器になった」

「堅いことは気にしなさんな」

「……。まあ、お主とのやり取りなど、普段のことじゃ。気に病む程のものでもないわ。儂と頂亀は、お主の将器と同じく未だ主を持たぬ。将器自身がそれを望んでおるでな」

「？」

「儂ら天鞘は、将器の半身……。故に意思を共有しておる。つまり、儂は鞘である以前に、将器でもあるのじゃ。儂らはまだ主などいらぬと思うておる。この毘左は神域であるが故に何人も近づかぬ。下界の戦事も例外では無い。ここにおれば儂らは権力争いに巻き込まれることも無いからのう」

「え？ 俺は？」

「お主は例外じゃ」

「ちよつと待つて。頭が混乱してきた」

長いセリフについて行けず、秀真は額を押さえながら唸る。

「えーつと、鞘には二種類あるんだよな。生きてる鞘天鞘と生きてない鞘地鞘。それは理解した。将器一つにつき鞘は一つってことでよかつたっけ？」

「厳密に言えば違う。地鞘と天鞘は 鞘 でもあり、刃なのだ。将器の真の力は、その真名と天地鞘二つの鞘を揃えた時発揮される。例えるならば、二つの鞘を持つ刀とも言おうか。普通の刀と違うのは、将器は鞘をつけることで力が増すということじゃ」

「何か壮大だね」

余りの面倒くさい説明に適当な相槌を打つ秀真。

「簡単に言つと、一つ、将器一つにつき、地鞘と天鞘という二つの鞘がある。二つ、将器の力は真名と地鞘、天鞘が揃った時最大限になる、って感じかな？」

「うむ」

「わかったけど、ややこしいな」

何とか簡潔にまとめることで、覚えようと必死である。

「習うより慣れるじゃよ」

「この将器の地鞘と天鞘が毘左にあれば、ね」

「うう…む」

半ば諦めながら深く溜息をついた。

「ふう……。ま、見つからなきゃ死ぬんだし、探すだけさ。考えてたって始まらねえよな。探す方法とか無いの？」

「無いことも無いが、鞘が特定のを指すのは天鞘だけで、地鞘は別に属性と特性さえ合えば何でも使えるぞ」

また、いらん単語がでてきたことに頭を抱える。

「属性と特性って？」

「属性は、将器が持つ自然体系の力を指し、特性は、将器自身がつ附加効果じゃ」

「？」

「つまりだな。仮に無名が 属性：炎 で、 特性：球体 だった場合、無名は炎に触れることで火炎弾を打ち出すことができる、といった具合じゃ。この力を地鞘と呼んでもよいじゃろう。この場合、炎が地鞘となっておる」

「はい？ 地鞘って名前の通りの鞘じゃないの？」

「うむ。地鞘とは、将器の属性にあたる自然物のことじゃ。つまり、属性を知ることとはそのまま地鞘を知るといつても過言では無い」

「天鞘には？」

「天鞘にも効果を付加できるようじゃが、僕は経験が無いのでその辺りは知らん」

「あ、そう」

二つの握り拳が高速回転しながら、秀真の両側に迫る。

「あゝ ああああ！！」

気絶したくとも気絶できない微妙な威力のグリグリに抗えず、悲痛的な叫びが洞窟に響きわたるばかりであった。

第九話 異変

未だ主を持たぬ、ただ所有者が自分であるだけの将器を見つめながら、秀真は溜息をついた。

将器に認められずして鞘を扱えるのかという疑問に、元癸は二つ返事で答えている。

「天鞘は不可能だが、地鞘は持っているだけでも使える。じゃが、やはり属性と特性を知らぬと難しいのう」

属性と特性……。うんともすんとも言わない将器からどうやってそのような情報を引き出すのか、方法のわからない秀真にとってそれは頭を悩ませる課題にしかならなかったのである。

「悩んでおるな」

「まあ、ね。もうちょい、簡単なヒントくらいくれてもよかったのになあ」

「期限は特に無いのじゃ。ゆっくり考えればよい」

いつもより静かな元癸の態度に、秀真は不思議に思ったが、また普段の気まぐれと思いそのまま突っ込まなかった。

「期限は無いけど、この山から出られないんだし、あまり意味はないさ。それに……」

「下界が心配か？」

「心配するような知人なんていないしな。でも、ま、気にはなるんだよな。下が」

「ふむ……」

思案顔の元癸が腕を組んで考え始めた。山から出たがらない彼が一体何に悩むのか少し疑問である。

「秀真よ。麓まで降りてみるか？」

「やだよ。将器を諦めるつもりは無い」

「そうでは無い。条件付きだが下山してみるか、と問うておる」

「え！？ 降りていいの？」

素つ頓狂な声をあげて、秀真はひっくり返った。この七ヶ月の間で初めて下山の許可が降りたのだ。それはもう、大変な驚きようである。

「うむ。頂亀には儼から言っておこつ」

「とか言つて、何か企んでるんじゃないの？」

言葉とは裏腹に、秀真の顔は嬉しそうだ。

「じゃから、条件付きと言っておろうが……」

会話に疲れたのか、声が弱々しい。

「……？ 師匠、何か疲れてない？」

「……」

無言の内に元癸は崩れ落ちる。豪快な音をたてて前へ突つ伏した。

「師匠おー！」

返事は返つてこない。

耳元まで青ざめていることに、秀真は気づいた。これでは、おそらく顔は真つ青だろう。

尋常では無い出来事に、しどろもどろしながら、倒れた元癸を置いて、秀真は居ても立ってもいられなくなり、急いで山を駆け出した。

目指すは、元癸と同じである頂亀。彼ならば何か知っていると思つたからだ。

第九話 異変（後書き）

すみません。更新するの遅いと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9202f/>

剣将になったら

2010年10月29日01時40分発行